

戸坂潤全集

第二卷

勁草書房刊

戸坂潤全集 第二巻

昭和 41 年 2 月 15 日 第 1 刷発行
昭和 47 年 5 月 20 日 第 8 刷発行 定価 1600 円

著 者 戸 坂 潤

発 行 者 井 村 寿 二
東京都文京区後楽 2-23-15

印 刷 者 白 井 倉 之 助
東京都青梅市根ヶ布 1-385

発 行 所 東京都文京区 勁 草 書 房
後楽 2-23-15

落丁・乱丁本はおとりかいたします。 精興社印刷・複製本
© Printed in Japan

3310-130213-1836

目

次

イデオロギーの論理学	1
------------	---

序	3
---	---

「性格」概念の理論的使命	5
--------------	---

「問題」に関する理論	20
------------	----

論理の政治的性格	39
----------	----

無意識的虚偽	61
--------	----

科学の歴史的社会的制約	69
-------------	----

科学の大衆性	80
--------	----

イデオロギー概論	95
----------	----

序	97
---	----

第一部 「社会科学」的イデオロギー論の綱要	98
-----------------------	----

第一章 イデオロギーの問題	98
---------------	----

第二章 イデオロギー論の課題	112
----------------	-----

第三章 諸科学のイデオロギー論	131
-----------------	-----

第二部 「社会学」的イデオロギー論の批判	153
----------------------	-----

第四章 文化社会学の批判	153
--------------	-----

第五章	知識社会学の批判	171
第六章	社会心理学の批判	196
日本イデオロギー論		
——現代日本に於ける日本主義・ファシズム・自由主義・思想の批判		223
序		225
増補版序文		225
増補版重版序文		226
序論		227
一	現代日本の思想上の諸問題	227
第一編	日本主義の批判とその原則	235
二	「文献学」的哲学の批判	235
三	「常識」の分析	250
四	啓蒙論	266
五	文化の科学的批判	278
六	ニッポン・イデオロギー	287
七	日本倫理学と人間学	299
八	復古現象の分析	309

九 文化統制の本質	316
-----------	-----

一〇 日本主義の帰趨	322
------------	-----

第二編 自由主義の批判とその原則	328
------------------	-----

一一 偽装した近代的觀念論	328
---------------	-----

一二 「無の論理」は論理であるか	340
------------------	-----

一三 「全体」の魔術	349
------------	-----

一四 反動期に於ける文学と哲学	358
-----------------	-----

一五 「文学的自由主義」の特質	365
-----------------	-----

一六 インテリ意識とインテリ階級説	371
-------------------	-----

一七 インテリゲンチャ論に対する疑問	376
--------------------	-----

一八 インテリゲンチャ論と技術論	384
------------------	-----

一九 自由主義哲学と唯物論	392
---------------	-----

結論	402
----	-----

二〇 現代日本の思想界と思想家	402
-----------------	-----

補足	413
----	-----

一 現下に於ける進歩と反動との意義	413
-------------------	-----

二 大衆の再考察	424
----------	-----

三 自由主義・ファシズム・社会主義	431
-------------------	-----

解説	鶴見俊輔	439
----	------	-----

あとがき	鶴田三千夫	444
------	-------	-----

イデオロギーの論理学

序

この書物は、過去一年余りの間に私が様々な雑誌に発表した文章を、略々発表の時期の順序に従って編集したものである。どの文章もそれだけで独立な統一を有っているのではあるが、書物全体が実は、初めから一定のテーマを追跡することによって、それからそれへと次々に展開された諸問題の一系列を形づくっている。それ故この書物を初めから順次に読むならば、個の文章だけでは気付かれなかったような必然的な統一が、容易に読み取れるだろうと思う。そこにこの書物を出版する理由がある。

ここに取り扱われたものは主に論理に就いての問題であると云うことが出来る。ただその論理という言葉が、所謂形式論理学でいう夫とは別であるということは、この書物の名前自身が物語っている通りである。人々は今まで觀念の、思惟の、認識の、科学の、論理学の周囲に集っていたように思われる。そして思惟の論理学に就いては、之を論理学以外のものの責任に帰して好いように考えていたのではないかと思われる。併し今吾吾にとって必要なのは、思想の論理学なのであり、それが「イデオロギー」の論理学なのである。

イデオロギーという言葉を観念形態という意味に用い始めたのはカール・マルクスの独創に由来するといわれている。従って今云うイデオロギーという言葉はただマルクス主義の理論に立ってのみ、初めて正当な問題となることが出来る。「イデオロギーの論理学」はマルクス主義にのみぞくする。

だが之は社会科学の公式の適用ではない、そのことはこれ等の文章に少し眼を通せば明らかである。そうではなくして却って社会科学の公式の論理的展開でなければならぬ。之は新しい論理公式を導来することを目的とする。夫々の文章がそれ故、論理上の問題を解くための公式として利用されるであろうことを、私はひそかに望んでいる。例えば世界觀の論争に就いての問題は「問題に関する理論」へ、真理乃至虚偽に関する問題は「論理の政治的性格」乃至「無意識的虚偽」へ、科学階級性の問題は「科学の歴史的社会的制約」及び「科学の大衆性」へ、夫々帰着することが出来るであらう。敢えて譬えるならば、それは一切の民族問題がマルクスの「ユダヤ人問題」の公式に帰着するようなものであるだろう。最初の文章「性格概念の理論的使命」は、之等の公式を導き出すための下準備に外ならない。

初めの方の文章では問題が比較的に無限定な形を取っている、後の方の文章が之を限定するのである。であるから、この書物はまだ之だけの内容では結末を有つのではない。次々に展開する筈の多くの問題が残されているわけである。好意ある読者がこの点に就いて私を誘導して呉れるならば、著者としてそれ以

上の報いを私は知らない。私は何を追跡し何を整理すべきであるか。

最後に一言しておきたい。私はかつて旧著『科学方法論』に於て、社会科学に関する科学論を後の機会に語りたいと約束しておいた。その約束は当分果すことは出来ないと思うが、この書物を出版することによって、約束の科学論の序説に代えたいと考える。

この書物を出版するには多くの人々の好意がなければならぬ。特に私は、恩師田辺元博士と先輩三木清氏との名を挙げようと思う。私の頭を初めてこの方向に向けて呉れた人は後者であり、誠に適切な批判によって私の頭を推進せしめて呉れた人は前者である。直接間接に私に勇気を与えて呉れた少なからぬ友人達の名も忘れることが出来ない。これ等の文章を初めて載せた諸雑誌の編集者と出版を快諾して呉れた鉄塔書院主とへ謝意を表す。

一九三〇・四・一二

京都

戸坂潤

「性格」概念の理論的使命

——一つの計画に就いて——

性格の概念は個性の夫と似ているかのように見えるであろう、併し二つは全くその成立を異にした二つの概念である。初めにこのことを決めてかかろう。

吾々が欲すると否とに關らず現に吾々が相統している理論的遺産に於て、最も遍在し最も有力な根本概念は、第一に普遍者の概念であろう。蓋し一般に理論の構造を形式的に——何か論理的に——見るならば、この概念が中心的な勢力を占めることは当然である。というのは理論の一切の内容はただ普遍者と關係することによってのみ論理的であり得るのである。理論の實際的な方法の上での順序は何であるとしても、論理の秩序から云うならば、まず第一に普遍者が掲げられ、之から普遍者ならぬものが引き出される、という形式が具わっている。普遍者に対する普遍者ならぬもの、之は形式的に——何か論理的に——特殊者乃至個別者である。特殊者乃至個別者は、理論的遺産の形式から見て、第二に有力な根本概念であろう。併し特殊者乃至個別者は如何にして普遍者から引き出されるか。

* 人々はすぐ様ヘーゲルを連想してはならない。ヘーゲルの論理

学は、従つてその普遍者と特殊乃至個別者は吾々にとって、より根本的な特別の関心を要求する。

弁証法によるか演繹法によるか、それとも問題提出の仕方を含く逆にして、帰納法によるか、などを決めようとするのではない。そのような方法は、論理に關する理論の又は單に理論の手続きに屬するから、前に示された通り、今の問題とは關係がない。そうではなくして、論理の——理論のではない——秩序に於て、普遍者から特殊者乃至個別者がどのようにして引き出されるか、を吾々は問うている。之を引き出す機能をもつ媒介者は個別化原理に外ならない。普遍者はそれ自身が個別化——之に加え又は之から差し引く——されることによって特殊者乃至個別者となる、と云うのである。個別化が目的とする終点は個物又はそれがもつ個性と呼ばれる。個物（個性）の概念は、第三の根本概念として普遍者に対して反対的に働きつつ、従来の理論一般を形式的に支配しているであろう。

* 個別化原理が時間であるとか空間であるとか今は顧みない。之を形式的に理解すべきである。例えばドゥッンス・スコトゥスのそれ。

論理家とも呼ばれるべき傾向の人々にとっては普遍者が、之に反して所謂生命哲學者達にとっては個性が、尊敬すべく愛着すべき根本概念であるかのように見える。前者にとっては普遍者は疑うべからざる課題であり、後者にとっては個性が凡ての問題の解決を約束する合言葉であるかのように見える。蓋し両者は理論に於ける好話柄であるように見える。或る人々は如何

なる思想家の思想に就いても普遍者を、他の人々は如何なる思想家の思想に就いても個性を、専らテーマとしようと欲する。

かくして例えばプラトンは普遍者の、アリストテレスは個性の、宗家であるかのように解釈せられる、等々。この場合、普遍者は個性に関係づけられ、又個性は普遍者に関係づけられ、そして、ただそうしてのみ人々の問題となるのである。特に、個性は、ただ個性と普遍者との関係に於てのみ、問われ得るのである。個性概念は従って常に個別化原理と共に——普遍者への關係に於て——理解されなければならないものである。

個別化原理が事実、時間乃至空間として与えられ得たことを吾々は注意しよう。この場合時間乃至空間を一般的に云うならば、觀念的であるにせよ現実的であるにせよ何か一般に外延的なものにぞくすることを、夫は意味するに外ならない。この外延的なもの——それは連続であるが——の上に於て、即ち之を一つの原理として、限定されたものが、恰も個物（個性）の最初の規定を云い表わす。この場合個物（個性）は連続的な外延者の限定として、限界を有つものとして、現われる。個物はこの限界によって他の個物から區別せられ、この限界に於て他の個物に連続している。事実に人々は或る事物を個物として知ろうと欲する時、即ちそれがもつ個性を多少なりとも明らかにしようとする時、その事物と他の事物との連続を仮定した上で、最初に両者の限界を見出し、かくて両者の區別を与えることによって目的の第一歩を達したものとするのである。個物（個性）は常に限界を与え得られることを以て、その最初の概

念規定とするのである。次に、仮りにこの個別化原理が、個物と個物との間隙を埋めていた当の連続を否定したとして見よう。残るものは断続的な原子である。個別化原理は原子に至って働きを停止する。原子 (Atom) は分割し得ざるもの、もはや個別化し得ざるものを意味し、そしてこれこそが個物 (individual) であるのである。かくて個別化原理の終点に於て、個物（個性）の概念は原子として、分つべからざる単一者として

（時には又モナドとして）窮極的に現われる。

個物の概念が、従って又個物のもつ個性の概念が、常に個別化原理と共に——普遍者への關係に於て——しか理解されない所以が之である。個別化の原理に於て、個物（個性）は他との限界を持つものとしてまずあり、そして窮極に於ては原子としてある。

性格の概念は然るに、個別化原理とは独立な成立を有っている処にその特色を示している。今それを明らかにしよう。

二つの事物の限界が与えられない時に於ても、二つの事物の性格は夫々明らかであることが出来る。植物と動物との限界は決して正確に与えられ得ないにも拘らず、即ち両者を區別するに充分な徴標が見出し難いにも拘らず、それを理由にして動物と植物との夫々の特色が不明であると云うならば、それは少なくとも常識の忠実な告白ではないであろう。吾々は事実、両者の性格を夫々——常識的に——知っており、又その限り両者の區別を、云うならば概略に於て知っているのであって、日常生活にとつてはこの概略さで充分であり、又この概略さに止まら

なければ日常生活は支えられないであろう。ただこのように概略に於て性格を理解することによって、動物と植物との限界が少しも与えられないというまでである（実は与えられる必要がないのである）。動物と植物との関係に於てはそれにしても一旦限界が問題となることが出来たが、之と異つて全く限界が問題となることの出来ない場合に於ても亦性格は明らかにされ得るであろう。例えば欧州文明に於けるギリシア思想とヘブライ思想との夫々の性格の如きがそれである。或る見方からすれば全文明がギリシアの性格をもち、又他の見方からすればこの同じ全文明が又ヘブライの性格をもつてであろう。性格は限界——この幾何学的なる規定——を有つことなくして、云わば力学的に、否、個性——モナドも亦力学的であると云うならば、化学的に、機能することが出来る。性格は相互に浸透する（この意味に於て又性格は、領域とは関係がない。尤もモナドも亦そうである）。性格概念が限界の概念とは無関係であることが明らかとなったであろう。すでに一般に限界と無関係であるから、性格が最後の限界としての単一者として現われなければならぬ動機は何処にも存在しない筈である。分割出来ないという性質を持ち出して、それによつては性格概念の解明に何の変化も起こされないであろう。かくて性格は限界や分割とは何の關係をもつものでもない。そして限界や分割は個別化原理に帰するのであつた、故に性格概念は個別化原理からは独立な概念成立の動機を有っているのでなければならぬ。

* 性格と常識との關係は重大である。後に之を明らかにしよう。

*** ライプニツのモナドの概念は個物乃至個性の概念の最も精練された場合の一つであるであろう。それにも拘らずモナドは遂に個別化原理からの制約を脱却することが出来ない。

人々は個物と個性とを区別せよと云うであろうか。個物は一つの限界概念であり、之に反して個性は、單なる限界概念ではなくして窮極的なそれであり、そして正にその故にこの規定を圧倒するに足るほどの豊富な他の内容を有つ、と云うであろうか。併しそれにしても個性概念は概念成立の歴史に於て、その概念の動機に於て、個別化原理に由来することは否定出来ない。性格概念は然るに、そのような歴史から、そのような動機から、自由である。

性格という言葉の原始的な意味は刻印である。日常的な具象的事物——凡そ学問の対象としてのみ存在し得ると考えられるような事物を私は以下考察の外に置く——の性格とは、この事物が有つ、即ちそれに与えられた、刻印を指す。事物は例えばAなるものとして、刻印されて、あるのである。同一の事物も様々の刻印を捺されることによつて、夫々の異つた性格者として現われることが出来る。同一の行動が或いは賞嘆すべきものとして、或いは唾棄すべきものとして、刻印を捺されることの出来るのが事実であるであろう。性格は今事物の性格であつたから云うまでもなく事物それ自身にぞくするのでなければならぬ、事物が有つてゐる關係を離れて任意な性格を刻印することとは許されない。仮にそれを許したならばそのような性格は結局性格としては受け取られないであろう。それは性格概念

自身に矛盾するからである。処がその事物それ自身に固有でありながらそれにも拘らず性格は、その事物それ自身から一応離れ得る性格を有ってゐなくてはならない、同一の事物が様々の性格を有つものとして現われ得たからである。今仮りに事物の性格という概念の代りに事物の本質という概念を引き合せて見ることが有効であると思われる。事物の本質はこの概念それ自身から必然に、事物への固有を意味する。事物Aの本質は α でありBの本質は β であるとして、人々はAとBの関係を α と β との関係によつて考察する事が出来るのである。この場合Aの本質が α として或いは又 β として、現われ得るのであつてはならない。何となれば本質はなる程事物に就いて人々が発見したものである外はないが、併し又人々によつて与えられたという規定をもつのであつては事物の本質の概念ではない。本質は常に、人々によつてどう見出されようとも結局に於てはそれとは独立に、事物それ自身に具わっている処の、根本的な性質を意味する。そこで同一の事物Aの本質が α となつて現われたり β となつて現われたり出来るということは——たとい事実上の誤謬として起こるにしても——本質概念自身から云つて許されない。本質概念は本質を見出した人々への関係とは独立に、一旦事実上この関係を通してなければならぬが併し結局のテロースに於てこの関係を脱却して、みづからを成立せしめている。それは人々にとつて彼方にある。これを押しつめるならば本質は正に一つの物自体——之こそ言葉通りの事物の本質ではないか——概念に帰着する処に特色をもつ。Aなる物それ自身——

物の本質——は苟くもそれ自身であつて現象でない限り、 α としても β としても現われることを許されない筈ではないか。処で性格概念は恰もこの点に於て本質概念と根本的に異っている性格——それは与えられた刻印であつた——は常に、人々にとつて、 α として或いは又 β として現われ得るものでなければならぬ。性格は之を与える人々への関係を、その結局のテロースに於ても脱却しない処に、特色を有つ。刻印は常に与えられるべきものであらう。本質概念の目的は——理念は——人々への関係を切り離す処に、之に反して性格概念の目的は之を最後まで持ち続ける処に、夫々の面目を現わしている。性格は人々への関係を含むことによつてのみ成立する概念である。刻印——それは与えられる——の概念が恰も之を注意せしめるであらう。性格はそれみづからに人々への関係を含んでゐる。それは人々と事物とを媒介することが出来る。事物は之によつて人々にとつて通達し得るものとなる、性格は通路を有つ。もし本質であるならば人々がそれへ通達するためには何か本質以外のものに頼らなければならぬであらう、例えば現象がそれであるであらう。性格は之に反してみづから通路を用意している。人々は性格を性格に於て知ることが出来る。事実、事物の性格は之を理解する人々の性格に相関的でなければならぬ——後を見よ。それであればこそ性格の概念は第一に人々の——人間の——性格を示すものとして語られる理由があり、吾々が今又それを更に事物に就いてまで拡張して語ることが出来る所以があるのである。性格を一つの人間的な概念と呼ぶことは誤りでは

ないであろう。尤も何か他の関心から動機せられて人間的と呼ばれるのではない、例えば浪漫的な興奮や道義的な謹厳さからそう呼ばれるのではない。ただ理論的に云ってそれが人々にとっての通路を用意しているからなのである。個性——それは結局個人概念から離脱することが出来ない——の概念から性格の概念を区別した吾々は、個性的なるものとして普通掲げられる処の所謂人間的なるものから、吾々の性格概念を自由にしなければならぬ。併しそれにも拘らず性格は——云わば理論的に——人間的である。も一遍云おう。性格は通路を用意している点に於て一つの人間概念である。——処で併しかの個性の概念は或る意味に於て人間的な概念で矢張りありながら、このような理論的に考えられる通路を用意しているとは思われない。個性の概念はそれ自身に個性の理解乃至取り扱いの概念を伴わない、それは例えば知識学的に取り扱われることの出来ない概念であろう。性格は恰も之に反して、常に知識学的な又は多少の注意を怠らずに言葉を使用するとして認識論的な、課題を含んでいる。性格概念はこの意味に於て人間的な概念であり、知識学的通路を用意している。

* 性格の概念を人格的なものから芸術的なものへ移したものは、テオフラストスであろう。

* * ライブニツのモナドは表象の能力を有っている。併しかかる能力は形而上学的実在の規定であって、知識学的な通路を意味するものではない。

性格は個別化原理から完全に独立であり、そして通路を有つ

ている。私はこの二つの点を指摘して個性概念との混同を防いでおこう。

さて併し性格とは何か。

日常吾々が接する具象的な事物は恐らく無限な数の性質を持っているであろう。事物はこれ等の性質の統一としてある。夫の性質はそれに特有な作用の範囲を与えられている。というのは或る性質は顕著であり之に反して他の性質は著しくないと考えられる。事物が含む云わば一〇〇の内容を、夫々の性質は幾つがずつ分け占めていると考えられる。かくて例えば神は全知全能という特質によってその内容の大部分を分け占められると考えられる。併し或る事物に就いて何が顕著であり何が顕著でないかは決して事物それ自身だけによって決定され得ることではない。或る視角から視れば甲性質が又他の視角から視れば乙性質が顕著なるものとして現われる。他の事物には無くただその事物にしか見出されないような或る性質は——たといそれが微弱であっても——顕著となることが出来、強大な性質であっても、それが多くの事物と共通であるならば顕著でないと考えられることが出来る。又事物の某性質——それが強大であろうと微弱であろうと——を特に注目することによって、その事物の理論的乃至実的な処理を進めることが出来ると見られる時、その性質は顕著なるものとして見られる。であるからどの性質が顕著であるかは実は、事物それ自身に固有な作用範囲の配分ではなくして、その事物が人々によって理論的にか實際的にか取り扱われ得る通路を媒介とする勢力の消長でなければならぬ。